

# プロティノスの情念論

——『エンネアデス』Ⅳ4, 18-21——

中 村 公 博

## 1 問題提起

プロティノスは、人間の情念（感情）について何を明らかにしたのか。これが本稿の問題である。対象とするテキストは、『エンネアデス』Ⅳ4 [28]（『魂の諸問題について 第二篇』）の18章以降である。なぜなら、この部分においてプロティノスは、いわゆる心身結合体としてのわれわれが持つ、苦痛や快楽、欲望といった情念について考察し、これら情念における心身の関係と認識の構造を細かく描写しているからである。それは、身体と関わる限りでの人間のいわば下部構造であると言ってよい。したがって、本稿は、この下部構造について焦点を当てることになるが、当該テキストに基づいて解明すべき問題を、より具体的に設定するとすれば、以下の二つになる。

（問題Ⅰ）プロティノスは身体についていかに考えたか。プロティノスはこれを「これこれ様の身体（物体）(toionde sōma)」と呼ぶ。当該箇所では提示されるこの概念の内容を、さしあたって一言で示しておくとするれば、「魂の影 (skia)」（あるいは「痕跡 (ichnos)」あるいは「似像 (indalma)」<sup>(1)</sup>）と呼ばれるもの

---

(1) 以下この三つの用語を区別せず、訳語では「影」で統一する。原語が異なる場合はそのつど注記する。

を与えられることによって生きている身体である。

(問題Ⅱ) その身体概念と関連して、プロティノスは、人間の情念について何を明らかにしたのか。とりわけ当該箇所では「これこれ様の身体」に宿る「魂の影」が、情念にとって重要な役割を果たしているという見方が提示されるが、このような見方が成立したのはなぜか。

## 2 問題解明の意義

この二つの問題は、要するに、情念を身体との関係において考察するということであり、その限りで、哲学史上の一つのトピックである情念論において、きわめて基本的なアプローチであると言えよう。しかし、これらの問題は当該箇所においてプロティノス自身が提起した問題と同じではないことには注意しておかねばならない。彼は18章冒頭でこのように問う。

### テキスト1

身体はそれ自身で何かを持ち、既に何か固有のものを持ちつつ、魂が備われれば生きるのか、あるいは、身体が持っているところのものは自然であって、その、身体に交わるものは、自然であるのか。(18.1-4)<sup>(2)</sup>

この問いが示すのは、この箇所におけるプロティノスの問題意識が、身体と自然 (phusis) の関係に向けられていたということである。すなわち、身体が生きていることは、自然からの何らかの独立性を保つてのことなのか、それとも、そのような独立性はなく、自然との直接の混交によって成

---

(2) 以下、引用はすべて『エンネアデス』Ⅳ4からのものであるから、章、行数のみ記す。テキストにはOCT (editio minor) を用いた。

立しているのか、ということである。

この問いが私たちにとってにわかに理解しがたいのは、この問いが無前提に提起されたものではなく、それ以前の13、14章における自然についての考察を前提にしているからである。そこでプロティノスが考えた自然とは、アリストテレス的な表現で言えば、植物魂（phutikon）（魂の植物的部分）のことであった。アリストテレス的立場に立てば、植物魂は身体に内在するものである。しかし、プロティノスはそう考えない。彼は、自然と動植物の身体との関係は、「火」と「（火によって）暖められたもの（たとえば空気）」のような関係だと喩える<sup>(3)</sup>。空気に暖かさが宿るのは、そこに暖める火がなければ成立しないという意味で非自立的事態であるが、火が去っても暖かさが残るという意味では半自立的事態である<sup>(4)</sup>。これと同じように動植物の身体は、世界全体の形成原理である宇宙靈魂の「最下位」（13. 3-4）の部分である自然から形相を与えられ、これを持つことで存立している<sup>(5)</sup>。ところが、空気に宿る暖かさは、それを与えた火とは別であり、火は空気には内在しないように、動植物の身体に宿る形相は、それを与えた自然とは別であり、自然は身体に内在しない。

これに対しては、それで生物の身体が生きていることを説明できるか、と問われよう。動物の身体を構成する水分がただ存立するだけなら、そこに物體的形相だけがあり、自然（植物魂）が内在しないと断言しても理解に困難はない。しかし、動物の身体が生きていることは、物體的形相以上の何かの内在を必要とするのではないか<sup>(6)</sup>。ところが、仮にその「何か」を

(3) この比喩は、すでに13章において、自然による制作の比喩として現れており（13. 8-11）、14章において、自然と動植物の関係について正式に導入されている。つまり、暖める火（自然）は、空気（物体あるいは素材）に働きかけて自らと共通性を持つ暖かさ（形相）を与え、暖められた空気（動植物の身体）を制作する。

(4) だから、動植物の場合は、この比喩が「光によって照らされた空気」の比喩よりも適切であると見なされている。

(5) このことは、およそ生物の身体は、生態系という有機的生命体系の中で発生し、生命を維持していると言えれば分かりやすいであろう。

自然であると考え、私たちの身体は何らかの形で自然を直接に所有し、たとえ「最下位」とはいえ、宇宙靈魂にも働きかけることができることになり、自然の超越性は否定される。ここでプロティノスが提起しているのは、そのようなアポリアなのである。

研究史上、右記の問題について包括的に取り組んだものとしては、Blumenthalによる研究<sup>(7)</sup>以上のものは、未だ出ていない。彼はその第5章においてプロティノスが情念について述べた箇所（本稿の対象箇所も含む）について詳細な注釈を施した結果、右記の二つの問題について次のように指摘した。（問題Ⅰ）については、プロティノスの考える「これこれ様の身体」とは、単なる心身結合体ではなく、生命原理としての自然あるいはその「影」を付加されることによって、生きている身体になったものである<sup>(8)</sup>。一方（問題Ⅱ）については、プロティノスはプラトンの心身二元論の立場に立っているが、情念に関して、自然とその「影」のレベルにおいては、この二元論を維持することは困難だと考えていた<sup>(9)</sup>。

これに対する一つの有力な応答はIgalによる論文<sup>(10)</sup>である。この論文は、部分的にこの二元論を否定する考え方を採ったと言える。つまり、プロティノスは、ある時期以降、「自然」という名の植物魂とは別に、これから派生した「魂の影」と呼ばれる気概・欲求魂の存在を認め、これだけは身体から独立してはおらず、擬似的な質料形相関係に入ると考えるようになったというものである。もしこの指摘が正しければ、「魂の影」という概

---

(6) 14章の最後で、プロティノスは、自然と形相との間に「いわば中間者」(14.11)があるのではないかと問う。暖かさに喩えられる形相は、それだけでは生命を指しているとは限らない。これは単なる物体的形相にすぎない可能性があるものであり、もしそうならば、生命は、物体的形相でもない自然でもない「いわば中間者」ではないのか、ということである。

(7) H. J. Blumenthal, *Plotinus' Psychology*. Hague, 1971.

(8) Blumenthal, *op.cit.*, p. 61. なお、注15参照。

(9) Blumenthal, *op.cit.*, p. 66.

(10) J. Igal, Aristóteles y la evolución de la antropología de Plotino, *Pensamiento* 35, 1979, 315-345.

念は、プロティノス哲学体系全体にまで影響を与えうる可能性をもっていることになるだろう。

本稿は、これらの指摘を念頭に置きながら、あらためて対象箇所を限定したうえで、上記の二つの問題に答えようとする試みでもある。

## 2 「これこれ様の身体」——（問題Ⅰ）について

（問題Ⅰ）から考えたい。まず、次のテキストを見ることから始めよう。

### テキスト2

その中に魂も自然もあるところの〔人間の〕身体それ自体は、「魂なきもの」とか「光に照らされた空気」のようなものであってはならず、「暖められた空気」のようなものでなければならない。動植物の身体は、いわば魂の影を持つものであって、苦しむことや、身体の快樂を快く感じることは、これこれ様の身体をめぐる（peri）ある。（18.4-9, [ ]内は中村による補足）

この引用は、テキスト1に続く部分であり、「これこれ様の身体」の当該箇所における導入状況を示す箇所である。この引用で明らかなのは、第一に、すでに14節で動植物の身体について適用された「火によって暖められた空気」という比喩が、人間の身体についても適用されることが確認されているということである。第二に、そのように喩えられる動植物と人間の身体が、「いわば魂の影<sup>11)</sup>」を持った身体であり、しかもこの身体が、苦痛や快樂といった情念が「それをめぐるである」ところの「これこれ様の身体」というアリストテレスに由来する概念<sup>12)</sup>で捉え直されていること

(11) テキスト2の原文では「いわば (hoion)」という婉曲表現がなされているので、以下これに注意して表記する。なお、註18参照。

(12) アリストテレス『デ・アニマ』, A1.403a26, b11, cf. B2.414a22

である。

しかし、明らかではないのは以下の二点である。つまり、

- (1) 動植物と人間の身体が持つ「いわば魂の影」が何を指し、何を意味するのか。
- (2) 情念が「これこれ様の身体」を「めぐってある」ということの意味とそう言える理由は何か。

まず、上記2点を考察するために、以上の議論において現れた諸要素を、比喩関係と共に、以下の図式によって整理してみよう。

図式1<sup>(13)</sup>

自然・植物魂	「火」	← 「いわば魂の影」? ……①
これこれ様の身体	「暖められた空気」	
{	?	← 「いわば魂の影」? ……②
{	物体 { 形相 (物体的) 「暖かさ」	← 「いわば魂の影」? ……③
{	{ 素材 「空気」	

テキスト1のプロティノス自身の問題をこの図式1で説明するなら、自然が「これこれ様の身体」に内在するかしらないのか、ということになる。

(13) 「いわば魂の影」をいかにみなすかについて、諸訳は以下のように整理できる。「いわば魂の影」を自然・植物魂と同じとみなす(①)のは、L. Brissonによる新仏訳(Plotin *Traité*s 27-29, Paris, 2005.)である(p. 253の諸注)。彼は「いわば中間者」をめぐる問い(注6参照)にも対ストア派の議論以上の意味を認めない(p. 251, n. 107)。邦訳(『プロティノス全集』中央公論社)も同様である(159頁註(4))。これに対して、①ではないが、②なのか③なのか判然としないのは、Blumenthal (*op.cit.*, p. 58-59), R. Harder/R. Beutler/W. Theilerの独訳(*Plotins Schriften*, Band 2b, Hamburg, 1962, S. 517), ②はJ. Igalによる西訳(*Plotino Enéadas*, Madrid, 1982)の解釈(“intermedio entre el alma vegetativa o «naturaleza» y la estructura orgánica”, p. 399, n. 89 cf. p. 394, n. 63)である。

その答えは、今後の議論の中で（１）の問い、つまり、「いわば魂の影」をいかに理解するかによって変わるであろう。現在のところその答えの可能性は上記①～③の三つである。もし①ならば、「いわば魂の影」は、「これこれ様の身体」に内在する自然を指すことになるし、②③ならば、「いわば魂の影」は、「物体的形相」かそれ以外の何ものかを指すことになり、自然は「これこれ様の身体」に内在しないことになる。ただし、当面それを決定する材料はない。

そこで先に（２）について考えたい。テキスト２に示されていたように、18章におけるプロティノスの関心の対象は、13・14章における動植物から、人間に移っている。それは、テキスト２の直後に彼がこのように語っていることから明らかである。

しかし、身体の苦しみやこのような快樂は、受動なしに (apathē),  
われわれ [人間] の認識 (gnōsis) へと至る。(18. 9-10)

プロティノスがテキスト２で「これこれ様の身体」に言及したとき、情念をまずは身体が受動すること（あるいは「受動様態」 pathē）として取り押さえる<sup>(14)</sup>というアリストテレス的発想を明らかに受け継いでいる。しかし、上記引用でプロティノスは、すくなくとも人間における情念は、そうした受動を欠いた「認識」だと考える。情念において受動するのは「これこれ様の身体」であり、受動しないで認識するのは、「これこれ様の身体」とは「別の魂」(18. 11) だからである。しかし、まったく意味で「別」ならば、「魂」と「これこれ様の身体」は独立であるから、情念がわれわれの認識に至ることはないはずである。ところがプロティノスはそうは考えない。情念の認識が行われる「魂」が、「これこれ様の身体」とは、「別」である限りで「(真の) われわれ」であるが、「これこれ様の身体」

(14) アリストテレス『デ・アニマ』, A1. 403a16-19.

は、その「別の魂」に依存し付着している限りで、「われわれの一部」だからである（18. 11-15）。

人間が情念を持つこと自体、すでにその依存性を証拠立てている。魂が身体から独立しているとしても、人間は身体を完全に支配しているほどに強い存在ではない。「(真の) われわれ」としての魂が「これこれ様の身体」の支配者として弱ければ弱いほど、「これこれ様の身体」を気にかけてあげればかけるほど、人間は情念に囚われる。プロティノスが情念を認識として捉えることは、情念を身体を受動と魂の非受動の二面から捉えることである一方、そこには、魂は身体から独立するが、身体は魂に依存するという形での関わりが想定されている。

以上をうけて、次の言葉が語られる。

つまり、そのような情念 [= 受動] は、決して魂に属するというべきではなく、これこれ様の身体、つまり、何らかの共通かつ合成したものに属するというべきだから。（18. 19-21）

ここで情念の帰属先は、魂ではなく「これこれ様の身体」であることが明確に認定され、この帰属先は「何らかの共通かつ合成したもの」と表現される。それは、単純な魂と身体の共通・合成体ではもちろんなく、すくなくとも上記図式1で示されたように「いわば魂の影」を含んだ構成を意味すると考えられねばならない<sup>(15)</sup>。したがって、(2)に関して、情念が「これこれ様の身体」を「めぐってある」とは、第一に、情念が身体を受動であるかぎり、「これこれ様の身体」に帰属するということであり、第二に、そうであるにもかかわらず、「これこれ様の身体」が魂に依存する

(15) Blumenthal は、「何らかの共通かつ合成したもの」は通常、自然（植物魂）と物体の結合体（つまり生き物）を指すのであって、自然からの照明（「魂の影」と同義である）を受けた物体、つまり「これこれ様の身体」と区別すべきであると述べるが、プロティノスはこういう言葉遣いにおいて十分に整合的ではないと注意している（*op.cit.*, p. 61-2）。



限りにおいて、情念は魂と何らかの形で関わる認識であることを意味する。では、そのような情念と身体と魂との関係において、「いわば魂の影」は どうして必要なのであろうか。プロティノスによれば、それは「これこれ様の身体」が「二にして一」(duo kai hen) という一見矛盾したあり方をしているからである。それについての説明 (18. 21sq.) は錯綜しているが、そのポイントは、仮にこの身体が合成体でない「一」なるものだったと仮定した場合に、背理が生じるということである。この場合、情念の帰属先は、魂なき物体と物体なき魂しかない。上記図式1で示したように、魂なき物体は形相と素材からなるが、仮にこれが分割された場合、形相に相当する「物体の中の一性」(18. 23) が失われて二つになりはするが、「物体そのもの」に相当する素材は変化しない。だから、魂なき物体は、その素材的側面に注目すれば、いわば無差別という意味で「一」であり、分割されたとしても、単純に二つになるにすぎない<sup>(16)</sup>。一方、物体なき魂は自分自身にとって自足的という意味で「一」であるから、そもそも受動を蒙ることはない。

そこでプロティノスは、「これこれ様の身体」が受動するのは、それが「二にして一」なるものだからではないかと考えた。物体と魂は、本当の意味で「一」になることは許されない。すでに述べられたように、互いに類を異にする「一」なるものだからである。それでも「これこれ様の身体」が合成体として存立しているのは、物体は魂からその「影<sup>(17)</sup>」を得て、両者の「中間 (metaxu)」となっているからである。これについて、プロティノスは以下のように記述する。

### テキスト 3

[中間 (= 「二にして一」) は] それ自身、困難をはらんでいる。それは危なっかしく、安定性のない交わりを得ているのであって、絶えず

(16) 木材を切断する場合を想起すればよい。

(17) 原語は「痕跡 (ichnos)」(18. 30)。

反対のほうへと運ばれる交わりを得ているのだから。ゆえに、(中間は)上下されつつ、下へ運ばれば、自分の苦痛を語り、上へ運ばれば、交わりへの希求を語る。(18. 32-36)

このテキスト3は、情念が生じるさまを、「二にして一」なる「中間」がそもそも「安定性のない交わり」であるということからいわば存在論的に説明していると言えよう。「これこれ様の身体」は、その合成的構成からする不安定性からして「苦痛」も「希求」も持ちうるというのが、プロティノスがアリストテレス的立場から出発して独自に到達した、情念と身体の関係についての独自の見方である。つまり、「これこれ様の身体」は、魂の「影」を宿す「二にして一」なる「中間」的なものだからこそ受動すると考えられる。人間がこのような「これこれ様の身体」をもつ限り、人間の情念の帰属先は、その身体にあると特定されることになる。したがって、「いわば魂の影」は、上記図式1において、①の「自然」でも③の「形相」でもなく、②であると存在論的に確定する<sup>18)</sup>ことができる。

以上をうけて、プロティノスは、苦痛とは「魂の影<sup>19)</sup>が奪われた身体(魂の影からの)乖離の認識」(19. 2-3)であり、快樂とは「魂の影が、身体の中で逆に再び調和したときの、生物の認識」(19. 3-4)であると規定する。つまり情念とは、「これこれ様の身体」が魂との「安定性のない交わり」の結果得た「魂の影」が奪われたり調和したりすることの認識なのである。しかし、このこと自体いかなることなのかについては、プロティノスは直接的な説明を与えていない<sup>20)</sup>。

(18) ここで「魂の影」の存在論的身分が確定するため、以降「いわば」という婉曲表現が落ちる。

(19) 原語は「似像 (indalma)」。

(20) ただし、プラトン『ティマイオス』64C-Dには、自然に反した無理な影響が一気に起こる場合が「苦」であり、それが自然の状態に一気に戻る影響が「快」だという記述があり(『ピレボス』31D-Eにもほぼ同じ内容の記述がある)、プロティノスはこれを参考している可能性がある。

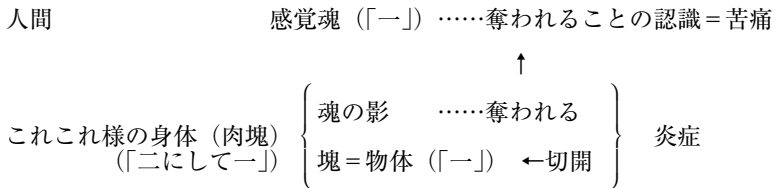
むしろ、ここでの彼の関心は、「魂の影」が「これこれ様の身体」においてなす、いわば認識論的な働きの方に向けられているように見える。それはまず、情念が認識であるとして、その認識内容が、身体において「魂の影」が奪われたり調和したりすることだということである。この認識についてプロティノスは、魂とりわけ「感覚魂に帰属し、この魂は、(身体の)となりで感覚し、諸感覚がそこで終わるようなところまで伝える」(19. 5-7)と言う。つまり、すくなくとも感覚魂は、身体の「となりに」はあるが、身体に帰属するのではない。しかし、身体に帰属する「魂の影」の働きを認識するのである。

ここで(1)についての検討に移ることができる。それは(問題Ⅱ)の検討に直結している。

### 3 情念と「これこれ様の身体」——(問題Ⅱ)について

プロティノス自身が提出している例(19. 7sq. q.)で考えてみよう。身体の肉塊が切開されたとき、炎症が生じて苦痛が走るのは、それが単なる「塊」ではなく、「これこれ様の塊(toionde ogkon)」(つまり肉塊)であるからだと言われている。これを以下の図式によって理解してみたい。

図式2



つまり、切開は分割という受動であり、これを蒙るのは「塊」としての「物体」である。しかし、これが炎症になるのは、「これこれ様の身体」が「魂の影」の宿る「二にして一」なるものだからである。一方、「魂の影」が奪われる乖離の認識と言われていた苦痛は、ここでは身体の隣に横たわ

る感覚魂が「その痛みを受け取って感覚した」(19. 11-12)と語られるから、「魂の影」は感覚魂に受け取られる内容である。したがって、「魂の影」は、身体の中であって、これを単なる物体の受動以上の働きをもたらすという意味で苦痛のいわば存在論的な原因であり、一方、身体から独立した魂に認識されるべき内容になるといういわば認識論的な働きをするのである。

これをプロティノスは魂=全体、身体=部分という枠組みを導入して説明しようとする。

#### テキスト 4

魂全体が、身体の受動を感覚したのであって、魂自身は受動しない。なぜなら、魂全体が感覚すれば、魂は、受動が身体に在って、そこに衝撃と苦痛が在ると語るからである。しかし、もし魂全体が身体全体の中に在って、魂それ自身が受動するのであったならば、魂は、「そこ(が痛い)」と言うことも伝えることもできず、魂全体が苦しみを蒙って魂全体が苦しんでいることになっただろうし、「そこ(が痛い)」と明らかにすることもできず、魂があるところが「そこ」であると言っただろう。しかし魂は身体のいたるところにあるのである。(19. 12-19)

身体が切られるとき、切られるのは、「塊」である物体の限られた部分(たとえば指先)である。このとき「そこ(という部分、たとえば指先)が痛い」と語るのは、身体ではない。身体全体にいきわたりながら、身体とは別である魂全体である。仮に魂全体まで受動していれば、人間は身体「そこ」(部分)を認知することすらできず、ただ身体全体が痛いと言うだけであろう。しかし、事実是这样ではなく、人間は苦痛が身体の中のどの部分に起こっているかを特定し、認識することができる<sup>(21)</sup>のである。

以上より、苦痛とは、身体の部分的受動から始まる。しかし、苦痛は単

なる塊が切られることとは異なる。それは、身体がすでに「魂の影」が宿る「これこれ様の塊」だからである。その苦痛は、「身体 of そのこが痛い」という部分の特定を含んだ認識であり、このとき魂全体は、身体とは別にあつて「魂の影」が身体から奪われていくことを認識している。

情念のこのようなあり方は、20章における欲望についての論述においてより明確に語られているように思われる。欲望においても、その始まりが「これこれ様の身体」にあることは苦痛と同じである。「身体でありながら、身体たらんと望むのみならず、魂よりも多くの動きを所有し、その所有によって、多くの方向へと引きずられざるを得ないもの」(20.5-8)、つまり、その時々状態によって様々なものを欲しがる身体が、「身体的欲望の始まり (archē)」(20.1) としての「これこれ様の身体」である。ではそれはいかにして魂の認識に至るのか。

#### テキスト5

感覚が欲望を学ぶと、隣の魂、これこそ我々が、痕跡を与える自然だと主張しているものなのだが、これも学ぶ。つまり、自然は、身体に始まった欲望の終わりである明瞭な欲望を学ぶのであり<sup>21)</sup>、一方感覚は、表象を学ぶのであり、この表象から、ついには、充足することを任務とする魂が充足するか、あるいは、抵抗してしっかりと立って、欲望を始めたものにも、それに次いで欲望したものにも、注意も向けないかである。(20.14-20)

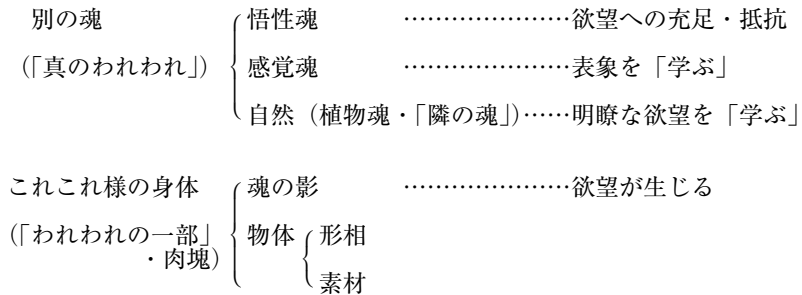
ここで注目されるのは、テキスト1で問題提起され、それ以来論述の舞台から姿を消していた自然が、「(身体の) 隣の魂」あるいは「痕跡 (=

(21) だから、指が痛いとき、「指においてその人は痛んでいる」という言い方が、この事実に即した言い方である (18.19-22)。

(22) 邦訳 (*op.cit.* 163頁註(2)) が受け入れている R. Harder/R. Beutler/W. Theiler, *op.cit.* の修正 (理由は S. 518) は採らず、底本のまま読む。

影)を与える」ものとして、再び取り上げられ、しかもその自然に「学ぶ (manthanein)」という役割が与えられていることである。さらに、テキスト5の直後で「自然はこれこれ様の身体を形作り、形相付ける」(20. 24-25)と語られ、その制作が再び確認されている。これに注意して、以下のように整理してみよう。

### 図式3



欲望において「魂の影」は、すでに述べられたように、苦痛と同様、「これこれ様の身体」に宿り、欲望を、単なる物体の受動以上の働きにする。その働きについてプロティノスが注目するのは、欲望が身体の生命維持に直結しているという点である。欲望が向かう先として当該箇所では挙げられるものは、「苦いもの」「甘いもの」「お湿り」「暖をとる」(いずれも20. 8-9)、「食べもの」など(21. 19-21)であるが、こうしたこと全ては、身体の存立に関わるものである。「魂の影」の宿る身体は生命維持のために、このようなものを自らいわば「衝動的に」欲する。その限りで、生命維持と欲望は不可分である。次のテキストを見よう。

### テキスト6

自然は母のように、影響を受けている身体の望むものに注意しながら、補正しようと努め、みずからの方へと引き寄せ、癒しをもたらしてく

れるようなものを求めて、その求めによって、受動している身体の欲望に（自らを）同調し、その終わりは、身体から自然へと移るのだ。ゆえに、身体は、自ら欲望するが、——人はたぶんこの「先・欲望」のことを「衝動」とも呼ぶかもしれないが——、自然は、他から、他によって、欲望するのであり、これを充足したりしなかったりする魂は別のものである。(20. 28-36)

このテキスト6において注目すべきは、欲望を、「これこれ様の身体」に始まる「先・欲望」（「衝動」と）と、それに自然が参与する欲望との二段階とに区別していることである。「先・欲望」は、身体が生命維持のために食べものなどを欲することである。しかし、この欲望は、身体が受動しているだけでは、認識されない。自然が、これに注意し、補正し、自分のほうに引き寄せ、同調する働きを行って初めて、生命維持への欲望は認識される。テキスト5で「学ぶ」と語られた自然の働きは、ここでは一種の認識として説明されるのである。もちろんそれは、感覚魂や悟性魂による認識に比べれば、最小限かつ原初的なものである。しかし、そうであっても、このような働きは身体にはないのだから、図式3にすでに示されているように、自然という名の植物魂すら身体から独立しているとプロティノスが考えていることになる。

このような考えは、アリストテレス的立場からすれば容易には理解しがたいであろう。なぜならアリストテレスは植物魂あるものには感覚魂があり、感覚魂あるものには欲望魂があるとみなし<sup>23</sup>、これらの魂（の部分）を区別しつつ、これらが身体から独立（離存）することを否定する<sup>24</sup>からである。しかし、プロティノスは、21章以降において、植物魂を欲望魂（to epithūmētikon）と同一視し、しかも、この魂の身体からの独立を肯定する立場を顕わにしていくなのである。22章冒頭において彼は、「我々

<sup>23</sup> アリストテレス『デ・アニマ』、B3. 414a32-b6.

<sup>24</sup> アリストテレス『デ・アニマ』、B1. 413a3-5, B2. 414a20-22.

においては欲望魂であり、植物においては成長的部分（魂）である」（22.1-3）と語り、身体にあるのは、この魂から「いわばこだまするもの<sup>25)</sup>」だとも言う<sup>26)</sup>。28章にいたっては、この魂を気概魂（to thūmoeides）とも同一視し、しかもこれが身体全体に自分の「影」を与えていると語る。たとえば「怒り」という情念すらも、「これこれ様の身体」、具体的には心臓と肝臓に帰属する。なぜなら、これらの身体的部分は血液・胆汁を供給するため、生命維持に不可欠だからである。このように、情念とは身体の生命維持と不可分な関わりを持った認識であるという見方は、20・21章での欲望についての考察以来プロティノスが見出したものに他ならない。

#### 4 結論

本稿の考察をまとめたい。

（問題Ⅰ）について、プロティノスの考える「これこれ様の身体」は、情念の始まりの本来的な帰属先であるが、それは「魂の影」が宿ることによる。この「魂の影」は、身体に宿りながら魂と関わるため、魂は身体から独立するが、身体は魂に依存するというあり方を成立させるものとなっている。

（問題Ⅱ）について、「これこれ様の身体」に宿る「魂の影」が、情念において果たす重要な役割とは、身体に宿り、情念を単なる物的受動以上の働きにする一方、身体から独立した魂によって認識される内容をなすということである。

そして、欲望の場合に明らかになったように、情念とは、身体の生命維持と不可分な認識である一方、その認識を最も原初的な形で行う自然（植物魂）すら、身体から独立しているという意味でプロティノスの心身二元

<sup>25)</sup> 原語は to hoion enapēchēthen。これも「影」と同義の表現である。

<sup>26)</sup> プロティノスのこうした見方の背後には、IV 4での魂についての探求の射程が、人間のみならず植物、大地、宇宙にまで及んでいることがある。「魂の影」についても、この大きな射程の中でいかに捉えられているか、更なる検討を必要とするであろう。



論は徹底していると言えよう<sup>27)</sup>。情念のようにきわめて身体的だと思われるレベルにおいても、人間は身体から独立した世界と関わっているというのが、当該箇所におけるプロティノスの洞察である<sup>28)</sup>。

---

27) したがって、当該テキストに基づく限りでは、本稿は、プロティノスが、自然に関しても心身二元論の立場に立っていたことを Blumenthal よりも強く肯定する。一方自然と「魂の影」とを区別する Igal の指摘は的確であるが、「魂の影」を気概・欲求魂と見なすことは、すくなくとも当該テキストにはあてはまらないと考える。

28) 本稿は、『新プラトン主義研究』第6号(2006)における拙稿(『プロティノスにおける身体と情念——『エンネアデス』IV 4・18-20を中心に——』)に大幅に加筆修正を施したものである。